

ブリ種苗放流技術開発事業（抄録）

村山達朗

日本栽培漁業協会が行うブリ種苗放流技術開発事業の一環として、ブリの分布・生態・資源動向を究明するため下記の調査を実施した。

1. 標識放流調査
2. 年齢推定調査
3. 漁獲統計調査

詳細は「日本栽培漁業協会研究資料 No. 」に報告されているので、ここでは結果の概要について述べる。

結 果 の 概 要

1. 標識放流調査

- (1) 山陰沿岸の釣り漁場で秋季に漁獲される1歳魚群と同時期に九州西岸域で飼付け漁業の漁獲対象となる群との関係、および翌春、山陰沿岸で漁獲対象となる2歳魚群との関係を検討することを目的とした。
- (2) 放流魚は1991年11月5日～7日にかけて、島根県簸川郡大社町日御碕周辺漁場で釣獲された169尾である。
- (3) 放流魚は体長組成から1歳魚と2歳魚から構成されていると推測される。
- (4) 1992年2月20日現在の再捕尾数は5尾で、放流後22日以内に放流海域周辺で再捕された。

2. 年齢推定調査

村山（1992）で用いた資料に千葉県、高知県、鹿児島県、および東シナ海中・南部で漁獲された魚体の脊椎骨資料を加え、より広範囲な海域に來遊する本種の生物学的特性について検討を加え、以下の結果を得た。

- (1) 平成元年度報告分もあわせ、日本周辺海域から採取した1,020個体の年齢推定を行った。
- (2) 本研究で推定したブリの成長は、日本海側では河井（1967）が推定した成長曲線に、太平洋側では古藤（1985）の推定したそれに近かった。
- (3) 太平洋側でも対馬暖流域と同じく南の海域ほど未成魚の輪紋形成時の体長が大きい。
- (4) 本種の主産卵場である東シナ海大陸棚縁辺部で採取された魚体の第1輪と第2輪の輪径分

布は太平洋側で房総半島周辺海域のものと、対馬暖流域では対馬から山陰沿岸のものと近似していた。

これらの結果から、東シナ海大陸棚縁辺部の産卵場集まる親魚群は、その多くが未成魚期には、太平洋側では房総半島周辺海域に、対馬暖流域では対馬から山陰沿岸に分布していたことが推測される。

さらに、これより本種が資源縮小にともない、未成魚の主分布域も対馬暖流域では山陰沿岸以南に、太平洋側沿岸では房総半島以南の海域に変化させてきたと考えられる。

3. 漁獲統計資料の解析

(1) 1991年の島根県の漁況

- ①モジャコの採捕期間は6月10日から7月30日で、操業日数は27日間であった。モジャコの来遊量は全般的に少なめで、漁期前半に荒天が続いたこともあり、漁況は低調に推移した。魚体は昨年より小型であった。
- ②1991年級は7-9月期は平年を下回り低調な漁況が続いたが、11月以降急激に漁獲量が増加しはじめ、平年、前年を大きく上回る好漁となった。
- ③1990年級は冬季(1-3月)は、刺し網漁業により県西部は平年並み、隠岐諸島では平年の約3倍の好漁が見られた。春季(4-6月)は一時的に漁況が低調となったが、夏季(7-9月)以降、旋網を中心に平年並みかそれを上回る水揚げが見られた。
- ④冬季(1-3月)における1988年級と1987年級の漁況は極めて低調に推移し、漁獲量は平年を大きく下回った。春季(4-5月)以降の1989年級の漁獲量は、海域間で差があるものの、平年並みからやや下回る程度であった。

(2) 日本近海におけるブリ来遊量の長期変動傾向について

- ①北海道から鹿児島県にいたる14定置網漁場における漁獲統計資料の解析を行った。
- ②ブリ漁獲量の経年変動の長期傾向は成長段階により異なるパターンを示した。
- ③成魚の来遊量は1950年代以降全国で減少傾向を示しており、特に1970年代以降は水温の低い北の海域ほど著しく減少している。
- ④未成魚の来遊量は1970年代以降長期的に指数関数的な減少傾向を示す海域は無く、熊野灘以西の太平洋側沿岸域と山陰沿岸～東シナ海沿岸では増加傾向にある。
- ⑤未成魚来遊量は年平均水温17℃以上の海域で1970年代後半以降増加した。

4. 文 献

河井智康(1967)：ブリの年齢と成長、モジャコ採捕のブリ資源に及ぼす影響に関する研究、農林水産技術会議、研究成果、30、86-99。

古藤 力 (1985) : Modeの季節移行からみたブリの年間成長量. 南西外海の資源・海洋研究, 1, 7-12.

村山達朗 (1992a) : 日本海における最近のブリの成長について. 日本誌, 58, 601-609.